



TITLE:

統計拾穂抄(一三)

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. 統計拾穂抄(一三). 經濟論叢 1930, 31(5): 749-762

ISSUE DATE:

1930-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129946>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第

卷一十三第

行發日一月一十年五和昭

論叢

遊興税の若干問題 法學博士 神戶正雄
日本の家族制度と民法 文學博士 三浦周行

說苑

勢力と經濟 文學博士 高田保馬
徳川時代の工業と商業資本 經濟學士 菅野和太郎
米の卸賣相場と小賣相場との關係 經濟學士 谷口吉彦
世界商品價格の決定 經濟學博士 作田莊一
獨逸舊税制の崩壊と財政調整法 經濟學士 中川與之助
歸屬理論の一考察 經濟學士 柴田敬

雜錄

元祿時代歸農武士の家計 經濟學博士 黑正巖
統計拾穗抄 法學博士 財部靜治
正司考祺の專賣反對論 經濟學士 堀江保藏

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

統計拾穗抄（二三）

財部 靜治

一六 J. R. Say の統計學觀

一、本邦統計開化大に發揚せられ、本年初秋國際統計協會第十九回會議國內に開催せられ、相當の成績を挙げし迄に達せると共に、學界、政界を始めとし、社會の各方面を通じ、漸く統計を重んずるの風潮を醸成せるや悦ぶ可し。然れども統計の利用愈々洽ねきに從ひ、益々之が誤謬及誤用を誠むるの要あるや謂ふ迄もなし。殷鑑遠からず、彼の官廳統計の詳悉確實を誇れる獨逸に於てさへも、前帝國建設後の前世紀八十年代に於て、官廳公刊書としての *Bavaria, Landes-und*

* 本庄榮治郎、日本社會經濟史三三三—三四三頁

Volkskunde des Kgr. Bayern. 1860-68, 5 Bde 編纂者たり、又明敏なる文明史家、社會評論家として令名ありし、Wilh. Heinr. v. Riehl (一八二三—九七年)を以て、「統計病」Die Statistische Krankheitと題せる一講演を行はしめ、統計濫用を痛罵せしめたるが如き史實あればなり。かゝる見地に立脚し、又統計學發達の跡を顧みつつ、目星き異説を搜す際、曾て一部の學者が統計學たる性質を認めず、寧ろそは夥しき統計事實、否寧ろ夥しき虚偽に外ならずとなせるを發見す、而も亦此非難は統計學の一個別學派に加へられたるに非ずして、その諸派に加へられたり、そは同時に統計學の歴史に屬す。而して此點に就き特に擧ぐべしとせらるゝは、獨逸の古大學派統計學末期の一代表者にして、後にその離叛者となりし August Ferdinanda Luder 英の Portlock 佛の J. B. Say なり。

II、Luder (一七六〇—一八一九年)統計學を否認するに至りし一大事由に就きては、舊著クトレーの研究中(二二及二三頁參照)に言及せる所あるも、尙少しく附説

せんか、氏は元來スミスの經濟學説を、獨逸に普及せしむるに努めたる、率先經濟學者連中の一人たり、學者としての經歷を地理及統計學に關する著書により始めしが、經濟學に關するその主著「國產業及內國經濟」iber National-Industrie und Staatswirtschaft, 3 Bde. 1800—1804 は、ロツシヤによりスミス學説の換言解釋と呼ばれし所なるが、そは「諸國民の富」の諸學説を、地理及旅行記の材料添附により、説明せんと努めたり、その死後一八二〇年に公けにされたる「國民經濟學」National-Oekonomie oder Volkswirtschaftslehre にありても、依然としてスミスの學説を踏襲したり、あらゆる歴史の語る所は、競争を是とするにありと唱へ、且つ、その師により克く守られたる節度を超へ、個人の利益は決して社會全般の利益に、背馳することなかるべしと主張せり。その間産業により智能的、道德的開化に及ぼせる影響を、啓發することにより政治學及歴史を、一新せしめたるの率先者を以て自任し、特に專制政治を攻撃せるも、此點に付てはヒュームの

學說承認に負ふ所あるや確かなり。經濟學に關するその諸著作、及諸國の狀況及資源に關する佛、英、和蘭の諸書籍の幾多翻譯以外に、Lüder は Kritik der Statistik und Politik, 1812 及 Kritische Geschichte der Statistik, 1817 の二著を公けにしたり、政治學說及統計學は元來彼の嗜める所にして、是がために多くの年月と勤勉とを費やせしが、今や右二著の公刊により、懷疑の態度を鮮明に發揮し、政治學說及統計學の無價値を示し、剩へ人を惑はすの傾向さへ作ふことを示すを、その目的としたり、熟慮の結果として、又同時代の諸事件特に佛國革命の諸現象により、記述派統計學がうその塊り、無用の混ぜ物たることを認識せりと言明し、此主張をなすの論據として、統計學の概念につき種々の意見を見ることを挙げ、又政治的空論家による幾多計算及豫見が、事の實際經過により裏切られたるを指摘し、諸統計學者が屢々攻撃を受くるの事由たりし、皮相、淺見、特に又物質偏重的偏頗を、摘發せる點に成功せり。且又、記述派統計學者あるがた

めに、諸國政府をして過多の政治施設を仕組むの興味を湧かしめ、重商主義及侵略に興悅するの風を瀰漫せしめ、常備軍を伸張せしめ、その他同種の諸罪惡を重ねたりとして、夫等の學者を非難せり。素よりその非難を加ふるに誇張の痕あり、その懷疑を過度に及ぼし、完全確實は達成し得べきに非ずとし、從ひて又信頼すべき歴史を編むは不能なりと迄考へ及ぼしたり。かくて前記兩著に過言を含むの譏りは免がれざるも、是がために、同學の諸先進者及同代學者中の一部により、懷かれたる統計學の不當過重は、その必須反動を喚起せるものとして、時勢に資せりと謂ひ得べし*。

三、一八三八年倫敦統計協會が皇國學會より分れて特立する、や、その綱領中 (Journal vol. I, 1839) 事實の原因又は結果を討究するは、統計の分に非ずと觀したり。而も亦事實に本づく歸納を、詳言すれば表及計數のみに止まらざるものを悉く斥ぞくることなし、寧ろ一切の結論を下すための良信念による基本及數學的舉證力を要求せり。同時に同年 Uster に於ける同統

* cf. Ingram, Art. "Lüder" in Palgrave's Dict. II. p. 649; Haushofer, Lehr- und Handbuch der Statistik. 2. Aufl. S. 25; Roscher, Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland. SS. 619 fg.

計協會總會に於て發表されたる Joseph Edisson
Portlock, An Address explanatoly of the objects and
advantages of Statistical inquiries は、實際上のあらもの
事物又は事實、特質等にして、計數により蒐め得べ
きものは統計なりと言明せり。こは統計學の獨立否定
なり。唯その間統計の研究にして、一の學問たるべく
は、その學問たる本質を方法それ自體に就き、立定す
べしと觀するの一閃は放たるとなすを得ん^{*}。その當時
に於ける幾多の佛國學者、同様なる見解を持せるは併
せて注意すべし、唯計數を纂輯するのみならず、常例
視すべき原因の存在を、立證し得べきが如く配列すべ
しとする點迄及ぼせるの差あり、最も鮮明に是を言明
せるは、クトレーと同時代の佛人 Antoine Augustin
Cournot (一八〇一—一八七七年) なり、即ち同氏はその
一著 Exposition de la theorie des chances et des prob-
abilités, 1843, 2. ed. 1857. 中、統計學を P. A. Dufau
により觀せられしと同一の地歩に置きたり、換言すれ
ば氏も亦斯學を定量及諸計數關係の一學問に歸せしめ

んとしたり、氏自身説く所によるに「世人が統計學
の語により主として意味せしむる所は、(その語源に
より示さる、如く) 政治社會を成せる人々の聚合によ
り、惹起さる、諸事實の蒐集なり、されど吾人は同語
を一層廣き意義に解せんと欲す。即ち吾人は同語によ
り、夥しき各種計數事實の蒐集及配列を、その研究物
體とし、偶然の諸例外とは明かに無關係に現はれ、諸
偶因 causes fortuites の影響と組合はされて、その影
響を窺はしむべき諸常因 causes régulières の存在を、
明かならしむべき諸計數關係を確かむるを、その目的
とすべき學問を意味せしめんと欲す」とせり、その生
前幾多の好著を發表せるに拘はらず、學者中の有數達
識者以外の人には、さ迄認めらるゝに至らざりし斯人
(氏一八三八年の名著「富の學理の數學的基本」獨譯か、一九
二四年に至り W. G. Walfenschmidt により、始めて達成され
しを想へ)の右統計學觀に接し、約九十年後の今日その
卓見を讃嘆せんとする邦人は、豈獨り吾人の如き迂夫
に限らんや、素より吾人は統計を土臺として、一種の

* cf. Meitzen, Statistik. 2. A. ss. 53, 69.

普通社會學を打立てんとするの、率先者たりしケトレ
ーの流れを汲まんと欲する者なり、その大著「人間論」
の公刊は、實に右の好著發表の八年前に屬す、されど
又吾人は數理統計の流れに對しても、敬意を表するの
一隻眼を失はん事を好まず、Comnot を敬するは是が
ためなり。英の碩學 Edgeworth が經濟學者として、
Comnot に感謝の念を負ふべきは、當にその數理經濟
學說に限らず、偶然の學理に關する傑作を貽し、蓋然
數理と統計學との關係を、指摘せる點に於ても亦然り
とせるは故ある哉*。

四、第十九世紀の初葉に當り、舊來の記述派統計學
は、古き統計學者漸次歿するに従ひて、没落に歸せり。
而して尙表統計學は少くともその當時の状態にては、
講座より教へられ得べきに非りき、*記述派統計學末期
の代表者たりし Linder が、右時勢の變を敏感し、
一學問としての統計學の可能を、恰も疑へるは前に述
べし所にして、同時にその主要理由をも併せて説け
り、此時運に際會し、恰も諸知識範圍専門化の新風潮

勃然として開かれ、精神的活躍を來たし、驚く程弘張
されたる研究を見るに至りしは、統計學理の變遷に大
關係を及ぼしたり、即ち特にスミスの大作（一七七六年）
は、その明瞭なる概念、序次及研究法により、經濟學
に安固たる根城を與へしが、同學は世紀の一旋轉に遇
ひ、英國に於けると同様、獨、佛、諸大學に於ても、
獨立教本として、從來の諸國家學從ひて又統計學より
分れ、そのための特殊講師により、講義及研究され初
めたり、獨逸に於ける Linder（一八二〇年）Kau（一八
二一年）その他の學者、佛に於ける Simondi（一八一九年）
Droz（一八二八年）等に先ち、（一八〇三年）之が講義に當
りて令名ありしは取りも直さず佛の經濟學者 Jean
Baptiste Say（一七六七—一八三二年）なり、その何れも
多少スミスの意を遵奉し、經濟學を以て經濟政策の内
容を包含せる、一學問として講ぜしが、そは古きアーヘ
ンワル派により、又その末期の驍將 v. Schöler によ
りても亦、統計學の研究範圍と觀せられし所なり。***

Say の經濟學原理 *Traite d'Economie Politique* は、

* cf. Heuschling, *Bibliographie historique de la statistique en France*, pp. 30. 31;
Meitzen, op. cit., S. 53; H. Wolff, *Theoretische Statistik*, 1926 ss. 113-115;
Edgeworth, Art. "Comnot" in *Palgraves Dict.* vol. I., p. 446.

** cf. Meitzen, op. cit. p. 34.

*** cf. f. Meitzen. op. cit., S. 31.

一八〇三年に始めて公けにせられ、屢々版を重ね、又諸外國語に譯せられたり、佛國にて古來著はされたる經濟學の著書中、事實上弘く世に行はるゝに至りし最初の本なり、その内容の大編別及その用語は古典的となり、後世に於ける幾多類書の模範となれり。一層詳説せる六編完結の他の一書は、實用經濟學大全 (Cours Complet d'Economie Politique Pratique) と題し、一八二八—二九年に公けにせられしが、そは講義録を土臺とせるものなりしも、前著に比し劣るとせらる。^{*}

經濟學上著しき功績を挙げたる Say は、その述作中幾多の機會に、統計の長所及統計學觀に言及するを忘れざりき。その「原理」の緒論中に誌されたる氏の意見は、更に又同書第一卷第九章に繰返さるゝも、一層詳細には百科雜誌 *Revue encyclopédique* に掲げし、一八二五年五月及一八二七年九月號の二論文に於てせられ、「統計の長所及一見解の吟味」と題せる Gioja, *Sui vantaggi delle statistiche esame d' un opinione, etc.* 又「統計學の部屬問題」に關する Romagnosi, *Questioni sull' ordinamento delle Statistiche* 又「統計學史要」に關する Mene, *Historia statisticæ adumbrata* 最後は男爵 Malchus の一八二七年百科雜誌への論文により、再説論評せらると言ふ。何れも知名の學者たるに依りて稽ふるに、當時 Say の統計學觀が、佛伊の學者に如何に大影響を及ぼせるか、推測するに餘りあり）次いで多少の増補を加へ、大全第九編中、經濟學と統計學との關係、統計學の諸著書の不完全、政治算術、統計學に固有なる諸形式の四章に分ち詳説さるゝと共に、同一主旨は繰返されたり。^{**} 氏の原理が一八二一年 C. R. Pinsep により、英譯されしに當り、その譯書の序に代へし廣告文中、本書を推稱せる一節は、統計學史上に於ける Say の地位を考ふるためにも、參考の値あるを以て、今之を引かんか、曰く「今始めて英文を粧ひて提供せらるゝ著書は、大陸出版界より發行されし一切の經濟學中、優れて廣く又正當に賞讃せらる。そは最初一八〇三年著者が尙佛國法制委員の空榮職を帶べる當時に公けにされしも、粗大又不完全の一書たり、檢閱官の警戒による機敏の校訂を加へられし

ment delle Statistiche 又「統計學史要」に關する Mene, *Historia statisticæ adumbrata* 最後は男爵 Malchus の一八二七年百科雜誌への論文により、再説論評せらると言ふ。何れも知名の學者たるに依りて稽ふるに、當時 Say の統計學觀が、佛伊の學者に如何に大影響を及ぼせるか、推測するに餘りあり）次いで多少の増補を加へ、大全第九編中、經濟學と統計學との關係、統計學の諸著書の不完全、政治算術、統計學に固有なる諸形式の四章に分ち詳説さるゝと共に、同一主旨は繰返されたり。^{**} 氏の原理が一八二一年 C. R. Pinsep により、英譯されしに當り、その譯書の序に代へし廣告文中、本書を推稱せる一節は、統計學史上に於ける Say の地位を考ふるためにも、參考の値あるを以て、今之を引かんか、曰く「今始めて英文を粧ひて提供せらるゝ著書は、大陸出版界より發行されし一切の經濟學中、優れて廣く又正當に賞讃せらる。そは最初一八〇三年著者が尙佛國法制委員の空榮職を帶べる當時に公けにされしも、粗大又不完全の一書たり、檢閱官の警戒による機敏の校訂を加へられし

* cf. Gide, Art. "Say, Jean Baptiste" in Palgrave's Dict. III. p. 357.

** cf. Heuschling, op. cit., pp. 24, 25.

ものなりしが、武人の巨傑没落せる後、重要な諸修正を施され、迅速に大部の三版を重ね、(一八一七年三版、一八一九年四版)他の大陸諸國に譯されしと共に、獨逸にありては一種以上の翻譯を見たり、著者の名は久しく英國公衆間に普ねく知られ、その著書は英國學者により熱通せられ、彼等は屢々之を參考したり、今やその原文を読み得るか、その本國語以外の一外語によりては、複雑又困難なる事柄につき明快なる概念を曉り兼ねべき、人々の用に供せんとして、英譯本として之を江湖に捧ぐ、本譯が教への爲に有用なるべきのみならず、富の普通學理として從來著はされたるもの、中、最良にして又方法最も宜しきを得たる、見解を含むこと覺知さるべきは、堅く信ずる所なり、その題目の取扱ひ上 Turgot の概論は重んぜられ、富の生産又は形成、及分配より、その最終消費に及ぼさる、その間讀者は漸進又平易の步調を以て、平明又敏快なる文態により指導さるべく、是を譯するは眞價あるもののみ、克く志し得べき所なり、譯本は最も簡潔なるを

期し、演繹の道筋中に遭遇すべき諸誤謬は、之を記號し、添加せるは僅少の統計事實に過ぎず、こは子弟のために省思又は應用の料を、供するの婆心に出づ」と、而して他の一節中には當時統計報告が、漸くその種類及確實性を増し、經濟學理による從來の諸結論を確證し、社會の諸實際階級間に、その學理の受入れを太く容易ならしめたることを説けり。^{*}

Say の統計學說そのものは、その原理第六版に據れる増井幸雄譯經濟學上卷(大正十五年發行)一〇頁以下にも説かる、本編の目的上前記大全中の所説により、その骨子を摘録するを可とすべきも、特に氏が夙に懷抱せる統計學觀の要領を窺ふの趣旨により、便宜上原理第三版によれる Carl Eduard Morisat 一八一八年の獨譯初版の所説を、拔萃譯載せんと欲す。^{**}

經濟學は統計學と如何に區別さるか。普通事實と特殊事實との側面解釋。兩事實は物の性より流れ出づ。

今尙恐らくは可なり明細に注目されずとすべきは、二種の事實存することにあり、即ち一面、普遍又は永續の事實あると共に、他面特殊又は可變の事實あり、

* cf. Say, A Treatise on Political Economy, tr. by C. R. Prinsep, pp. vii-ix and v.

** cf. Say, Darstellung der Nationalökonomie oder der Staatswirtschaft. SS. 7-12.

普遍事實は同様なる事態全般を通じ、物の性に基づく結果なり、特殊事實も同じく物の性に發するも、それは幾多の力介在し、恰も個々の場合に交互に制限せらるゝ結果なり、兩種の事實は一様に争ひ得ざる所なり、二者背反の觀を呈する場合にありても亦然り、蓋し重き物體は地に落つとの、物理による普通法則あるに拘はらず、泉水は空中に飛騰す、泉水にこの特殊事實あるは、平衡法則が破るゝことなき重力の法則を犯すの一結果なり。

吾人の研究對象に關する、右の二種事實につきての知識は、異なる二學、即ち經濟學及統計學を形成せしむ。

經濟學は鋭敏に觀察せられたる事實を、恒に指示しつつ、あらゆる富の性は何たるかを示す、その性に關する右の知識に本づき、之が作出の方便に敷衍し、富がその分配上經過すべき途筋と、その減却を促すべき諸現象とを描く、そは右の範圍内にて觀察さるべき、諸普遍事實の總括なり。そは富に關して問はるべき、

諸影響及諸原因の知識なり、換言すればそは如何なる事實が、必然連鎖をなし、甲事實は常に乙事實の結果たるを示し、又この連鎖あるの理由を示す、而も亦之が解釋を最早專斷なる假定に求めず、何故にこの連鎖が成立つかを、純粹に、各對象の性に訴へて會得すべし。經濟學はその毎鏈環を順次案内すべく、依りて結局何人にも頭腦確かならば、是等鏈環が全體として、如何に繋がり合ふかを、洞察し得べきが如くなすべきなり、現時經濟學の方法を以て、優秀とすべきや茲にあり。

統計學は一定の時、特殊の一地方に於ける生産及消費の狀態、並にその人口、その勢力、その富の狀態を叙述し、それ自體として現出し秤量せしむべき、事件（獨譯者註。年々の移民、犯罪、徵募兵、民事々件、火災、美術展覽、得度式、否實に自殺）の比をも叙述す、そは特殊事實の一總括なり、而も亦當然その細目にも及ぼさる。

經濟學と統計學との間には、政治と歴史との間に於

けると、同様なる區別あり。

兩者は何れも他の力強き援護を要す、夫れ經濟的觀點より諸國を觀察せんとするに當り、蒐集されたる個々の事實を、由來せしめ構成せしめたる普遍事實を誤解する限り、換言すれば經濟學の諸原理につき、不案内たる限り、有效にその目的を達せんことは不可能なり、同様に普遍の結論が、統計により蒐められたる個々の事實の一集團を、本として下さる、迄は、是等原理に徹底的に通曉し得べくもあらず、二學が此期に至る迄も、何故に混同せらるゝか、その理由は疑もなく茲にあり、スミスの著書は光目映ゆき實例により、助援せらるゝ至醇の經濟學原理と、教訓に富める考察を経込みたる、出色の統計報告とに充てる、交錯の一文庫に外ならず、されどそは二學中甲者又は乙者の、完備せる一論著たらず、寧ろ適切なる諸觀念と實證的報告とが、文彩多く錯雜せる一大混沌界なり。

統計は信賴するに足らず、又常に不完全なる事實の一織綜たること屢々なり。

經濟學に關する吾人の知識は、完全の域迄高められ得べし、詳言すればその全體として經濟學を組成すべき、普遍事實全般の究明に到達し得べし、之に反し統計學に關する吾人の知識には、此運命永久に恵まれず、統計學は歴史と同じく、多少不確實又必然不完全なる事實の、一叙説たること不易なり、古代及遠隔なる諸國の統計としては、間斷的にして又極めて不完全なる試みを見るのみ、而して今代につきては、有爲の觀察心と觀察に當るに利便なる立脚點を占むるの幸福とを、兼備せる一人存在するは稀なり、知見を搜し出すべき報告書の不確實、特殊政府否私人の絶えざる不信、反抗心及不注意あるがために、(學問上受入れ得べき人口實査が、佛蘭西にて始めて行はれしは、¹⁸³⁶の死後即ち一八三六年なるを注意すべし)明細なる殊異の事實を蒐めんとする、吾人の焦慮に對し、屢々踰越し難き障礙として聳へ立つ、かゝる障礙を汲み乾し得たりとするも、確實を續くるは一瞬間に限らる、從ひてスミスは特に幾多統計報告に外ならざる政治算術につき、信ぜ

ざることを白狀せり。

經濟學は之に反し、震撼すべからざる基本に立てり、同學の根底をなせる諸原則が、争ふべからざる普遍事實に據れる、嚴正の論結たる程度に於ては然り、素より普遍事實も特殊事實の觀察に立脚す、人は一切の特殊事實中、最もよく觀察されしもの、最もよく確かめられしもの、吾人自身により直觀されたるものを、拔萃すること、なし得べく、次いで恒に齊一なるべき結果が、その内より湧出て、一の誠實なる判斷により、此齊一が何處より誘導せらるゝかを示し、併せて又その例外は、同様に強く確められたる他の原理の、實證として現はるとせんか、右の結果を以て信頼すべき普遍事實として公示し、又その事實を更に新吟味に應ぜしめんとする、あらゆる人々の坩堝に、確信を以て引渡すの資格を得ん。

以上は Say 統計學觀の一般論なるが、之が一應用は同書中、何れの國にても外國貿易が、内國商業程重きをなすことなきを説ける一節附註（一八四頁参照）に

第三十一卷 七五八 第五號 一四二
示さる、併せて譯載せんが。

内國產物價額の明細なる計算を、著しく尊重する國々にありても、外來商品と内國產物の價額の割合を、明確に見積るは未だ曾て可能ならず、かゝる試みは又徒勞たるべし、實を謂へば統計的説示は何等の大實益あることなし、蓋しその見積が可なり確かなる時にても、その精確なるは長期に亘りて通用することなきを以てなり。眞に有益なるは普遍事實、普遍法則の知識なり、換言すれば原因結果關聯の知識なり、此知識のみ可能の各機會に、如何なる策を採るを最も可とすべきかを指示し得べし、經濟學に於ける統計の用は、諸原理の顯現又は又實證に亘る實例を授くるに過ぎざるべし、統計それ自體としては決して原理を立定するを得ず、諸原理は事物の性に訴へて、立定され得べきのみ、統計は最も宜しきを得たるものにてても、事物の量を教ゆるに過ぎず。

諸事實の觀察を土臺とする研究法は、疑もなく Say 以前にスミスの採れる所なるも、Say は寧ろ少數原理

より演繹せる結果に、觀察せる事實を比較せんとする程度に於て、事實を重んぜんとす、従ひて統計をも好みて援用するが如き態度なきは、寧ろ當然なり。又氏が如何に演繹に巧みなりしとするも、各方面の推理上悉く適正を得たりとすべきに非ず、現に Pinsep は前譯本の自註により、原著者演繹道程上の誤謬指摘の一例を、右内外商業比較觀の批評として示したり、曰く「右の論旨は諸事情の如何により、正しきこともあるべく、然らずとすべきことあるべし、國民的欲求は結局は常に、國民的産業及努力により供給さるゝの要あり、されど一國民をして内國產の大部分を、他の諸國の產物と交易することを、遮ぎるべき何物がある。

Tyre の民衆は内國の產物以上に、外來の產物を消費せらるゝに察せらる、夫等外國產は内國產物により購入さるゝの外なかりしも尙然り、眞に然りとすべきは、Tyre が一國民とすべきよりは、一都市とすべきことなりき、和蘭は幾多の殊異につき Tyre に似たり、かゝる觀想はその生産の要部を、外國產物の改作

における、各社會に適用せらる」と。

尙附言するの要あるは、*Opus* がその晩年に臨み統計學に關する、意見を代へしに似たることなり、一八三二年九月一日(同年十一月中旬に歿す)附にケトレーに宛てし一書信は、右中央委員會名譽會長の親切に答へたりと認むべきものなるが、就中現に大全の第四卷中同様の説をなせると同様、人口確實調査の必要を力説せる後、之を承くるに次の語を以てせり、「こは人の壽命を究め、又人命の諸蓋然數問題につき、なされ得べき計算全部のため、眞に重要視すべき所なり、こは諸家族安樂の近眞度合なり、蓋し所信によるに安樂を享くるの多少により、疑もなく率直に活力を變せしむべく、そは保險及年金の計算を、全然幻想的たらしむべき所なり。されど予はその運命の要度を確かむるため、發見すべき困難を虚構することなからんとす、唯人は尠くとも之に注意を注ぐの要あり、蓋しトンチンに關係する人々の如き選良者は凡て、無名人口を生む人々の如き群衆の、身の上につき展開されたる死亡表

により、誤謬に投げ込まるべきを以てなり」と、この言明上 Say は統計學者が、單純なる叙事以上に脱越するに至るを、可とするを認むるに至れりと謂ふべく、右 Say の意見はその後に至り、獨逸の一類才、Casper の研究（歐文統計書展覽會陳列目錄參照）により確かめられたり、即ち同人は貴族階級より拔ける富者千人、伯林市の浮浪人千人を料とし、貧困により死亡に及ぼす影響、眞に怖るべきを確かめたり*。

五、Say は謂へり、普遍の結論が統計により蒐められたる個々の事實の一集團を、本として下さる、迄は、是等原理に徹底し得べきにあらずと、同趣旨を氏が別言せる所によれば、統計學に關する吾人の知識には、普通事實究明の運命永久に恵まれずとし、結局統計がその事實の原因又は結果を示すに至れば、一般に經濟學に歸すとなす、かくて統計學を以て經濟現象に關する材料蒐集に當るの助手たらしめ、全く獨立の魂なき下婢たらしむる者なり。大家 Knies が Say は蕪辭を聯ねて、統計學を統計日知錄 statistisches

Noizencompendium に貶せしめ、歴史の姉妹たる統計學を、經濟學及經濟政策の腰元に墮せしめたりとせるは名評なり。以下その趣旨に小評を加へんと欲するも、是に先ち注意を促すべきは、當時尙官廳統計幼稚なりしのみならず、Say が統計學に通ぜざりしことを以て、右の主張を生みし一事由視し得べく、右の主張も恕すべき點あることなり、即ち氏は明かに狹き經濟統計のみを解し又思惟したり。換言すれば氏は、Collet の内外商業政策により、生み出されたる商品交易及商品生産の少數材料のみを、統計視したるのみ、その本國には道德統計學者を出せるも、そは氏の活躍當時には未だ存せざりき、國誌は就中之を人口統計文けに付察するも、佛蘭西にては一の不識境とすばかりき。かくて氏をして當時諸國に發達せる、經濟學理及統計をうちて一丸とし、雄大なる一系統論を編むの才たらしむるには、統計に關する知識淺薄に過ぐとすべきものありき*。而も亦リスト初め一部の獨逸學者氏を貶するが如く、スミスの大著の通俗化役者 Vulliamy

* cf. Heuschling, op. cit., p. 26; Block-Scheel; Handbuch der Statistik, s. 113.

** cf. Wolff, op. cit., SS. 166, 167; Knies, Die Statistik als selbständige Wissenschaft S. 49.

risateur 視すべき乎、經濟學に通ずること淺きを以て、是を斷ずるを避く、されど Gide が氏を評し、歴史及哲學の素養に就きては、スミスに及はず、見解の獨創及深淵に就きては、リカードに如かず、唯氏を以て片々たる通俗化役者視するは不當なり、眞の意味によれる自由樂觀派經濟學の木鐸たりしは彼なりとせるは、自國の古賢及その道統の威嚴を、高からしむるの至言に庶幾からん。

經濟學がその命題を編まんとするや、學者或はその何れかに偏するの嫌ありとすべきこともあれど、普通に二根源に據り、否その二根源を有するに過ぎず、その一は經濟學上通曉せらるゝ幾多個別科學の、一つより得たる原則を、全國民につき典型的として採用するにあり、こは個人の經濟的性質と倫理的性質と相違するがために、極めて曖昧又不定とすべき一根源なり、その二は全國民又は關係大量につき、直接現象又は兆候現象の計上及推算により、從ひて統計的に、かゝる原則を歸結するにあり、その他の諸抽象を引出すの確

實根底となり、又國民經濟概念に適合すべきは、明かに後者によるものゝみなり。地理、人文地誌、歴史その他の諸學が、統計により示さるゝ事實と、かゝる事實に本づく抽象とを、その知識範圍に取入るゝも亦同様なり。

歸納的經驗及その結論と、統計事實及その結論との、かゝる聯結あるがために、統計學の學問たる性質觀は、即座に問題となる、*statistique* が統計學に因果關係究明の能を認めず、此効果を擧ぐるに至れば率直に經濟學に歸すとせるや、經濟學に期待すること確かに過大なりと謂ふべし、かくて統計學を以て一定物格を有する知識界と觀することゝせんが、已むを得ずかゝる組合せに關與せる一切の物格を、統計學の範圍に取込むか、又は一限界を立て、その物格の考察は之を境として、その以上は最早統計學に屬せず、他の一學問に屬すとすべく、かくて又利用されたる統計報告は、後者の補助方便に過ぎずとして、取扱ふべきことゝなる。

統計學を觀して一方法たりとするの觀點を採り、統

計により取扱ふべき一切の物格を、他の諸學の諸方法には閉されたる特殊側面より、認識せしむとせんか、他の諸經驗知識の範圍内に於て、その性質上多少專屬的に、統計手續により研究さるべき一面は、應用統用の個別任務として現はれん。